

カキの新たな樹形改造技術「すばっと主枝再生法」

果樹試験場かき・もも研究所

[研究のねらい]

カキは喬木性のため樹高が高くなりやすく、摘蕾等の管理作業は脚立による高所作業が多いため、作業性や安全性に問題があります。カキの樹形改造は現在カットバック等により行われていますが、適当な位置に垂主枝がない場合には実施が困難です。そこで、不定芽が発生しやすく徒長枝の伸長が旺盛であるカキ樹の特性を活かし、どのような樹形にも適用できる単純で画一的な樹形改造技術について検討しました。

[研究の成果]

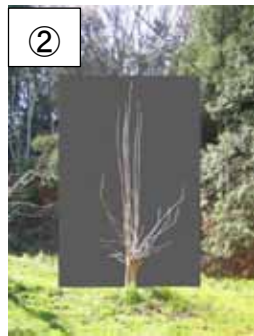
1. 冬季に「刀根早生」および「平核無」樹の主幹を地上高 60cm 程度の高さで切断し、5月中旬に主幹部から発生する新梢を育成します。発生した新梢のうち長いものは、1年目の冬季には3m程度まで徒長します。2年目の春季(発芽～展葉期)にこれを主枝を育成したい方向に誘引します(図1)。3年目には切断前と遜色ない品質の果実が収穫できます。
2. 樹勢判断の一指標となる主幹切断前の垂主枝および側枝先端部の新梢が長いほど、主幹切断後に発生する新梢が長くなります(図2)。
3. 新梢の芽かきにより、日照条件が向上するとともに葉が大きく葉色が濃くなり、新梢伸長が促進され、充実した主枝候補枝を育成できます。

[成果の活用面・留意点]

樹形改造1年目の新梢が硬化するまでは、仮支柱に軽く縛る等の新梢折損対策が必要です。「刀根早生」、「平核無」以外の品種への適用性については未確認のため、実施の際には間伐樹等で試して生育を確認してください。樹勢の衰弱した樹では切断後の新梢伸長が劣るため、樹勢を回復させた後で行ってください。新梢基部には枝幹害虫が発生しやすいため、適宜防除を行ってください。



① 切断した主幹部から5月中旬には新梢が発生します。発生した新梢に芽かきを行い、伸長を促します。



② 1年目の冬季には、順調に生育した新梢は3m程度に徒長し樹形改造後の新主枝となります。



③ 新主枝を任意の方向に配置します。順調に生育すれば、樹形改造3年目には着果し収穫が可能となります。

図1 樹形改造の手順

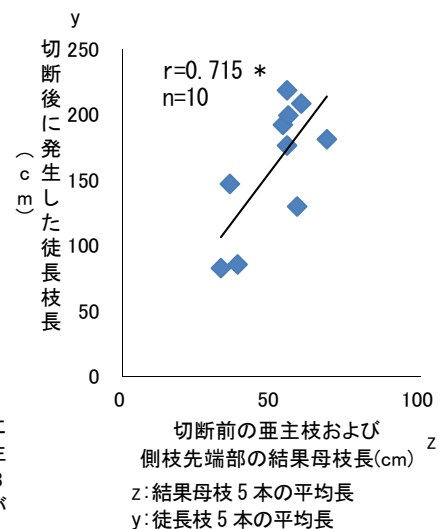


図2 主幹切断前後の枝梢長の関係

(問い合わせ先 0736-73-2274)